夏期「文芸特集號」

眞劍な勞働文化の芽

—夏期文藝の選を終えて—

編集部長　**平島敏治**

盆、正月は美しい着物が着れるものと、物心ついた時分から、観念的に覚り、大人になつた現在、息子に下駄の一足なりと買い与えたいと思うのは誰しも変らないことである。

その盆、正月こそはゆつくりしようと思つて迎へたお盆も先ずボーナスの少なかつたことゝ、借金の返済でオチ〳〵と落ちついてはいられない。これにかてゝ加えてナケナシの金で受けた配給米が黄変米で、ウマ〳〵と政府に毒米を食わせられた恰好で、今年の盆ほど炭鉱労働者にとつて最悪の日はなかろう。

この様な物情騒然たる世相に、一マツの清涼剤として夏季文藝募集を例年通り試みたが、いつもながら編集部の企画の不手際から、組合員大衆にアッピールする様なテーマも与えることが出来なかつたことについては全く自責の念に絶えない。

而しながら回を重ねる度びに世相の悪環境にも染まず、貧しい労働者の文化が芽生へ成長していることは見逃せない。

アメリカ一辺倒の吉田内閣の圧政の中で本当に民族の文化と民主主義を守り抜くものは光栄あるプロレタリアである我々労働者に他ならない。

今や労働者は悪政デフレ経済の政府の犠牲に供されんとしている最早我々の生活は我々の手で守り抜かねばならないことを知り、国民的詩人である啄木の歌を紹介し夏季文藝募集の意義を訴えたい。

友も妻も、かなしと思うらし
病みても猶
革命のこと口に絶たねば

成績發表

創作

一席　お婆ちゃん　三川　春野　一夫
二〃　挽歌　四山　佐藤　臣芳
三〃　若い坑夫　三川　北村千麻夫
佳作　四山　永田　光次
〃　三川　臺河原　譲

感想文（主婦）

一席　三川　葛西ワサ子
二〃　〃　佐藤　久子
佳作　宮浦　坂本　清子
〃　〃　加藤ハル子

感想文（組合員）

一席　三川　藤木　克己
二〃　三川　葛西　正身
佳作　三作　志岐　吉雄
〃　三川　佐藤とんぼ

學童綴方

一席　本所（小四）中村　洋文
二〃　三川（〃一）山口キミ子
三〃　三作（中一）森　義国
佳作　三川（小三）中尾　彰
〃　港務（〃六）柴田久美子
〃　三川（〃三）山口　博司
木村まさあき
〃　宮浦（〃二）山下みちよ

詩

天　三川　河原畑隆男
地　本所　原田　波八
人　宮浦　高椋　龍生
佳作　三川　吉門　明
〃　〃　春野　一夫
〃　宮浦　増山　一

短歌

天　製作　平島　逸雄
地　宮浦　山西　光一
人　三川　浜辺　幸和

俳句

天　製作　森口きよ秋
地　三川　北村千麻夫
人　製作　森口きよ秋

川柳

秀句　三作　浜口　哲雄
〃　〃　森口きよ秋
〃　三川　中尾二三男
〃　三作　浜口　哲雄
〃　三川　横田　聖平
〃　〃　畑田　栄

寫眞

入選　男　田中　重憲
佳作　風景　池上　茂
〃　風景　西村　政良
〃　田中　重憲

その他　三川笑呂九　本所　中村けんじ　宮浦　中村かめを　宮浦　高椋龍生　三川藤末克己　四山　福永亘　宮浦　中村かめを

詩

＝天＝

らくだ

三川　河原畑隆男

—家族会員へ炭婦協加入への招請

いびつな頸で　おもたくふりかえる
ためらいを瞬くおん身らの眸には
沓く旅さつた愉悦の泉が　ゆれている。
愚なるよ、さ嘆と悔恨のあぢけなき瘤を背負い
敗走する雲とともに　追はれゆく
主なきらくだら。
並びゆけば　美しきものを
誹謗する組織のなかに　群れかたまり
おん身らは思慮もなく　太古え歩み入るか。
枯涸した魂の砂れきをふみしめ
風葬を窺うさい狼の野心を肋にひめて
いやはてに　よろめく樹海の安息をたづね
崩れゆく沙丘のかげにありては
もの憂く　安逸と惰眠とを、
はた、さかしらなる虚栄と粉飾に
饑餓ある激しさもて渇仰することの愚さを
おん身らは　知るであろう
弱々しく咆哮するおん身らの怒りが
つれなく掠歇とはなりて
影うすきおん身ら自身をつゝむ
ときに——。
〈あゝ、千尋の蒼を背にして鉱脈の果てに
ツルふりあぐる人々えの　献身は
そのかたくなな妻の座からは
拓かれもしまい〉
歩め、らく駝よ
頭をあげてかぐろなるこの新しき土を踏め
たとえ意志なき足どりであろうとも
吹きならす角笛の、はたなびく旗風の
澄めるこの生命の音いろに
おん身らの心耳を　傾むけよ。
蝕まれゆくのは　月暈のみかは
おん身らの曇れる鏡をこそはつしと撼け。
—苦悩する泪も　び爛した排泄も
禿鷹はこともなく　かすめさり
昔日の残がいのうえに投げうつであろう。
歩め、らく駝よ
匂やかな季節の風の中
もはや、昏い泥いろの径はらしなはれ
新樹にてりかえる光芒のさなか
みはるかす新生の緑は展かれるものを。

日常の努力を望む

—詩の選後に—

北原　一男

涼しい夏で、今年はいはゆる夏枯れが流行らないだらうと思つてゐたら、政財界はもとよりの事、豊富なスタッフを揃へてゐる筈の「みいけ」の詩壇迄夏枯れ模様である。入選作にしても　河原畑氏の「らく駝」が僅かに精彩を放つてゐるのみで、「石炭の街」「切羽」何れも、力量不足と云ふより努力不足の感が深い。題材も自由だし何の制約もないのだから、締切り間際になつてから一夜漬けで書き上げなくとも、詩の二篇や三篇なら、いつでも未発表のものを持つ位の、日常の努力こそ望ましいものである。

「らく駝」ややもすれば固くなり勝なテーマを詩情を損う事なくまとめ上げた技法は評価さる可きである。

「石炭の街」言葉の強さにもかかはらず、迫力に乏しいのは感動の燃焼が足らないからである。それでも共鳴を呼ぶのは題材と、これに取組む作者の誠実な態度に依るものである。

「切羽」油虫の様な裸人像の中から、たくましいレヂスタンスが生れ出でる事を希う、坑内描写が言葉丈けの強さになつてゐるのは努力不足の故である。

「変身像」巧みであるが弱い。「夢」前半に切つて仕舞つても詩で通用しよう。後半を価値あらしめる為には一苦労欲しいところ「女の戯言」秀れた詩情であるが、安易な所点が目につく。

作文　兒童

海水浴・日曜日

編集部選

＝入選一席＝

海水浴

ヘヤ馬南　四年　**中村洋之**

バスをおりて海水浴場についたら山のような人でにぎわつている赤、青、水、黄、白色とりどりの海水着をきてまるで松ぼたんがひらいているようだ。沖の方では汽船がとおつている。その上に白い入道雲がむくむくとかおをつきだして見下している。ぼくは体そうしてから水につかつた。あおむきになつてねていると波がきて体をさらつて行くようだ。なんべんもなんべんも波がおしよせてくるちちのところまでいつてかおを水につけておよいだ。

まだおよげないのでざんねんだかおを水につけると体がうくのでおよぎよい。光美ねえちやんがうきぶくろをなげてくれました。ぼくはそれにつかまつて足をばたばたさせておよいだ。波が体をひつぱるようなきがする。太陽はまばいゝほどてつている。光美ねえちやんが「もう休けいよ」といつたのでぼくは日かげへ走りこんだ。

評＝シッカリと好くつかめました。まつ直ぐなにごりのない目。

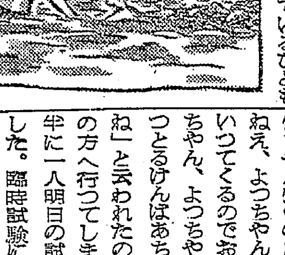
＝入選二席＝

かいすいよく

荒四小　一ねん　**やまぐちきみこ**

わたしはうみがだいすきです。なつやすみになるとかいすいよくにいきます。にちようびにはおとうさんとおかあさんもにいさんとみちこちやんとわたしと五にんでかいすいよくにいきます。

みんなにこにこしていきます。かいすいよくでおよいでいるひともみんなにこにこしておよいでいます。ぼうとにのつているひともいます。



わたしたちものりましたうれしくてたまりませんでした。おそくまでうみであそんでばすにのつてかえりました。

うみはだいすきです。

評＝よくかけました。ごほうびにまたつれて行つていただくと好いですね。

＝入選二席＝

日曜日

歴木中　一年　**森　義国**

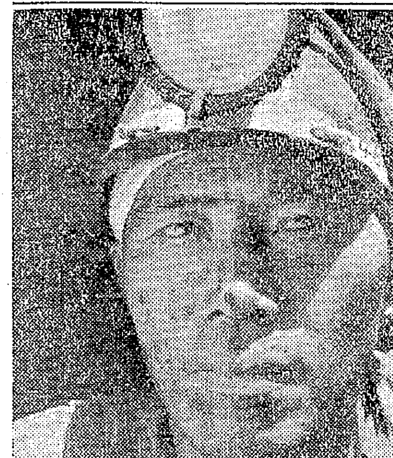
「日曜日毎に雨ばつかり」とお母さんはぶつぶつ云つて洗濯物を家の中にかけておられる。

丁度学期末考査の真最中の日曜日で今日中はどう考えても遊ぶ事は出来ないようだ。土曜日の晩からいつものようにいとこの信ちやんが遊びに来て　とまつている。信ちやんは小学校の一年生で僕とあばれるのが大好きだ。相撲人形遊び、野球ゲーム、童話読み、漫画読み等沢山のプランをたてゝいたのにと思うと試験というものがつくづくうらめしくなつた。時々信ちやんは僕の所によつて来て「ねえ、よつちやん相撲しゆい」といつてくるのでおばあさんが「信ちやん、よつちやんな今試験の始つとるけんばあちやんとあすぼいね」と云われたので走つてさしきの方へ行つてしまつた。僕は四畳半に一人明日の試験科目の本を出した。臨時試験に悪かつた理科をこんどこそと思つてはみるが、りくつが分らなくてなかなか覚えられない。しばらくの間は夢中でやつているが信ちやんの笑い声が聞え、それに又兄ちやんの声がまじつてとても楽しそうだ。トランプをやつているようだ。兄ちやんは昨日で高校の試験が終つて今日は天下泰平のような顔で朝からまだねていたのだつたのに、と思うと僕は一人ぼつちになつたようで耳ざわりがして仕方がない。僕はさかいのふすまをぴつたりしめた。隣の栃原先生の謡の声がはつきり耳にきこえるが反つて僕の心は静かになつた。

数学は余り苦労しないので一寸にして音楽をした。作曲家の略伝と記号の種類、音符、休符について山をかけて夜はちよとだけして信ちやんと遊ぶ計画を立てゝ一休みした。大の字にねて目をつぶるとぎしきの方でも大変な静けさ誰の声もまるでしない、みなねむつているのだろう。

僕は今楽しい夏休みを迎えて、思いがけないよい通告表をにぎつて遊びたかつた試験の日を思いうかべています。

評＝素直に書けている。周囲の人物も好く活写されていて好感が持てる。



＝入選＝

『男』

四山　田中重憲

データ＝コニフレックス、ヘキサノンF三、五、八五M・M絞り二二、廿五分ノ一秒、D七六　ベロナR三　D七二

選評　町田定明

入選画題男とある、将に然りである。男らしい仕事を顔しかもクローズ・アップで表現した苦心がうかがはれる。特に少しばかりの石炭のよごれが此の画面を強調して居る

佳作一席「風景」近代的な感光材料を上手に使こいなした作品で、此のクラシツクな風景をより新らしく表現したよさが印画面より発散して気持ちが良く、ネオ・クラシカルと言つた行き方で面白い。しかし画面の構成上線の組合せが少し不足と言つたところ惜しまれる。

佳作二席「鉱山の初夏」感覚的な鋭さがあり、迫真力を持たした作品であるが人物の動的感興も在り、足の動きが妙に目を引く。人物の動きとその形に一考すべきである

その点、実に惜しい作品である。

短歌

「日」

岩本宗二郎選

天　製作　平島　逸雄
兵の日に苦しみたりき延岡の月見草開く土手を掘りつつ

地　宮浦　山西　光一
工場の煙突群が煙吐かぬ時さえぎりもなく日のとほる家

人　三川　浜辺　幸和
月末に日雇の姉が貰ふ金は吾が給料の切れ目をつなぐ

佳作　三川　中尾　龍夫
骨折の痛み語らず幼等の騒ぎ眺めて日日をまぎらす

宮浦　加藤　浩二
いつになく早起きの子が朝顔の花かぞえつつ絵日記をかく

宮浦　下川　友一
夏の日の灼けし船積場にこぼれ散る硫安は白き粒に光れる

三川　木村　守
腰に落盤受けてひとりで昇坑りしがその日小便の出ぬと歎かふ

三川　草野　秋歩
「若者よ体をきたえておけ」夏の日のいよいよ青き海のコーラス

四山　起汐　春松
腕より流るる汗は押してゆく日灼けし炭車に触れて乾きぬ

港務　下田　敏枝
小安を保つが如く日日廊り庭木のみどり洗ふ雨を見つ

三川　山田　治夫
空襲のさなかに聴くも逝きし子の命日がまためぐりくる夏

三川　上田　鉄男
入坑の終れば入事放置す朝日影濃くなりし坑口

宮浦　河原畑幸一
作業衣のデモ隊の中に目ざとくも我に笑みかくる日焼けし妻が

【選評】今回の応募作品は概して粒が揃つていた。然し格段に優れた歌が見当らなかつたことは聊か期待外れの感がある。これはいつの作品募集の場合にも感じるのであるが、ほんとうに打ち込んだ歌でなく、いわゆる間に合はせの歌が多いということである。矢張り不断の勉強が大切である。たとえ題詠であつても厳しい精神と詩品とを忘れてはならない。平島君の歌は回想の一首であるが理にこもる感動が溺れていないので心を搏く所がある。「一瞬喪失の歎きや戦争への反撥が出ているし深い詩情をたたえている。山西君の歌には憎まれない庶民の生活感情が描かれている。極めて客観的に取扱つてあるが含むところが深い。四、五句が生きている。浜辺君の歌にも現実生活の歎きが盛りあげてあるが此の歌には主観が強く働いている。嫌味な歌になつていないのは態度が描つているからである。中尾君の歌と下田さんの歌は一見似通つた境地のようであるが気持ちの上では全く反したものを示している。加藤君の作は明快で情趣に富み、下川君の歌は忠実な写象が認められる。木村君の歌には独自なものがあるが結句の辺りに一苦労欲しい。草野君のも変つている。思ひきり卒直に切り込んで明快な調子を掴んでいる。起汐君の作は真面目な態度であるが結句が少し誇張的にうけとれる。山田君のはうまくまとめてあるが技術でこなしたといふ感じがする。山田君の歌も鮮明ではあるが軽い。河原畑君の歌は良い境地である。整理がゆき届いていたらもつと感銘の深い歌になつていたであろう。

俳句

吉岡禪寺洞選

（天）　製作　森口きよ秋
灯ともせば夜の金魚の朱をこぼす

びんに飼われている金魚であろう。灯がともされたときの、金魚の驚きがわかる。それを「朱をこぼす」という言葉で表現されている。これだけのことなら平凡に近い、もちろん「朱をこぼす」の技術のよさはあるが、しかしこれによつて作者の生活の様体を示してはいない。けれども、作者が炭坑生活をしている事実によつて、そのふんいきと動きをそう決定することは不当ではあるまい。価値は内面的な—心の動きにある。

（地）　三川　北村千麻夫
朝顔を咲かせ炭鉱地区古き

ひとくちに炭鉱風景だなどという評はつゝしみたい。いちおうそれにちがいないが「朝顔を咲かせ」といつた言葉の軽妙と、それが朝顔であるところに、炭坑地区、そしてそれの生活者を遺憾なくひきださせてくれるものがある。そこに単なる客観句だの、風景作品とは異なるものがあるのである。鶏頭でもコスモスでも句を成すであろうが、朝顔には及ばない。季語はこうして真実に生かさねばならない

（人）　製作　森口きよ秋
慕情断ち黒き金魚を愛しける

見方によつては厭味を感じる人もあろうが、裏返しにすると、特色をもつているといえるであろう。一般的にはないでもなかろうが、黒い金魚を愛好する人はすくない。慕情—恋愛—に悩みぬいた心のやりどころ、そうした暗い心に黒い金魚が住む

悩みぬくというけれども、そして作者は慕情断ちと叙してはあるが必ずしも一切が拭い去られるものでなく、心の傷痕はある

可否はしばらく措くとしても　もしも私がこの句を作るとすれば「慕情断つて黒い金魚を愛している」と口語で表現する「愛しける」よりは「愛している」の方が、現代人として身近い言葉だからである。これについては多くの問題があるがこゝでは触れない。

佳作（十句）

宮浦　山西　青蛙
朝顔に無事故の保安日誌がつゞく

三川　宮崎　天馬
溶接の光にうごく夜の金魚

三川　北村千麻夫
夜の金魚ゆらぎやまざり坑水漬き
陥没の畳が崩るゝ夜の金魚

宮浦　井手口湖舟
オルゴール朝金魚の水換ゆる

製作　森口きよ秋
坑出るや朝顔の彩胴にしむ

宮浦　古賀　邦雄
一夏の悲しき命金魚守る

宮浦　宮崎　四八
過去を知る如く金魚の臨終古りし

三川　益城すゝむ
公傷の躯に金魚の生々と

宮浦　井手口湖舟
金魚玉にごりし水に旅疲れ

＝選後寸言＝

炭坑という特殊の生活圏にあつてつくられる俳句—、それは私たちでは得がたい詩境の宝庫でもある。それを生かして作られている幾つかの作品を除くと、大体に於て浅いなという気がする。なぜ浅いかという理由は、いろ〳〵あるであろうが、第一に形式の問題がある。第二にデリケートがないということである。デリケートがあることによつて、形式は生かされそして自由性をみとめることが出来よう。「物」とか「事」とかが描写或は直叙されて、枠の中にはまとまるのでは浅い。一句の把握もそれが感性であれ、知性であれつまり、デリケートな作者のあたたかによつて成しとげられるのである。そのためにはもつと対象ととつくむことである。

私は二、三十年前、大牟田や田川方面の人々に、炭坑の俳句を強要した。その頃多くは身辺を離れて、吐き船情調などの、都会風の境地を求むる傾向があつたからである。その後炭坑にも俳句が盛んになり、炭鉱俳句としての傑作といわれるものもないではないが、坑底に働く人たちの真に力のこもつた作品にあまり出会わない。坑外を詠つた或は坑を出た時の感銘とか、入坑時の感情はべつとして炭塵に挑むものの力ある作品がである。

海を、山を詠う人は多い。しかし山骨に身をうちつけ、単調そのもののような、海面の悩む複雑そうしたものからつかみとつてくる作品に乏しい。炭坑に生きる人人の俳句に希望したいのは、このような山骨、このような海面の悩みを求むると同じようにそれを坑内から築きあげて欲しい。それは炭塵に挑まる渾身の力が俳句として生れるであろうことを信ずるからである。俳句は強靭なる短詩である。

川柳

キャツプランプ

片山　玄風　選

秀句

三作　浜口　哲雄
キャツプランプ親子二代を引受ける
生涯を石炭に捧げた父の意志を継ぐ、親子二代の姿は美しく尊い

三作　森口きよ秋
キャツプランプ贅沢でない肉を買い
地下で生活する者には体が何よりの資本である

三川　中尾二三男
生きていたキャツプランプは泥と塗れ
九死に一生と云うか、かつぎ出された生存者へ思わず歓声が湧く、その際をフラッシュがパツパツとひらめく

玄　風
キャツプランプ街の寝姿見て帰り

佳作

宮浦　永野　章平
残業のキャップの寿命確かめる

三川　宮崎　竹窓
帽灯のにぶさと二番方上り

三川　横田　聖平
無事故とはカンテラからの四十年

三作　森口きよ秋
口笛のキャプランプは叱られる
無事だつたキャツプランプへ妻と子と

三川　寺尾　剛
キャツプランプの明るさくらべる新入者

潮干狩

片山　玄風　選

秀句

三川　横田　聖平
初島を母に指差す潮干狩
心温まる風景

三川　畑田　栄
雷の怖さを知つた潮干狩
かくれる場所のない、広々とした場所での雷は最も怖しいものであろう

三作　浜口　哲雄
潮干狩海の広さえ腰が伸び
何もかも浮き出て、目にみえるようである、海の広さえが効いている

玄　風
潮干狩常盤と云う皮膚の色

佳作

三川　横田　聖平
浜育ちの妻を見直す潮干狩

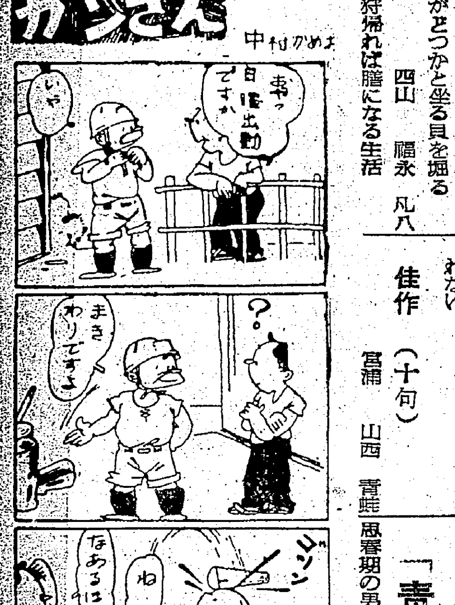
三作　森口きよ秋
潮干狩日焼けが怖いほゝかむり

四山　福永　凡八
子の龍がいつち重たい潮干狩

宮浦　永野　泰子
初島がどつかと坐る貝を掘る

四山　福永　凡八
潮干狩帰れば膳になる生活

カンさん　中村かめを



キャップランプ

頭と顔のさかい

寄る年波になると、どうもオツムリ（頭）が気になるもようで、或る日、職組の村松組合長が宮川組合長を訪れ、話のついでに「アアタはイッチョンハゲンデスナ」と云えば宮川組合長人差指をオモムロに頭にあて、ツルツとするところが頭で、顔になるとすべらないですよ。とは頭と顔の境界の見わけ方。

不心得者

こんど会社の職制に、〇〇心得というのをつくるそうである。大体どんな職制を敷く様になると、通称ウバ捨て山がオール職長になる頃で、次長が居り、代理が居り、心得が居る。大体ドガンカ仕事ばさすゝちやろか、と専ら組合本部で評判、組合も副組合長、次長が居るけん、心得ばつくつて、心得同志で交渉させるか、という話も出たが、不心得者と一カツされた。会社も不心得者を出さぬ様。

黄變米異變

黄変米がクローズ・アップされて来た井戸端会議も隣のバケツの米をみる状態で、職場の昼弁当も黄変米が話題になつている。何しろ、お膝元の三池港から陸揚げしたので、いさゝか大牟田児も目を丸くしている。経済懇談会をいつもやるN部長が、今時は外米が一番好い、大体フエルカラといつていたのが近頃では、外米は一寸遠慮しましようかといつている。

原爆の祈り

中央労使協議会は九日より開かれた。組合側は宮川組合長、各支部長をはじめ幹部連がズラリ。一方会社側は佐藤所長をはじめ各坑長がズラリ。所長の挨拶によりはじまつたが、長崎原爆投下記念の十一時二分のサイレンが途中で吹鳴らされ、両雄ともに厳粛な黙祷を捧げ、交渉に入つた。

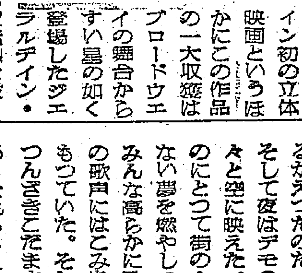
お盆の映畫

「眞白き富士の嶺」

昔、ず子沖で遭難した開城中学のボート部生徒を悲しんだ流行歌〃真白き富士の嶺〃をテーマに映画化したもの。学校から冷遇されていたボート部の選手たちが、音楽部の女教師と女生徒の援助でボートを新造したが、病気の先生を見舞おうとして嵐の日に散る。長谷川一夫の息子林成年がデビューするのをはじめ、新人市川和子、北原義郎、沢村美智子など。（11日から太陽館・新世界）

「青春前期」

思春期の男女高校生二人を中心に學校と家庭をつなぐ汚濁の世の中に、この若い世代の人たちの清く美しい純粋な生態、愛情等を追及する異色の問題作である。出演者には「日本の悲劇」以来久方ぶりの大船出演の上原謙、進歩的な女教師に淡島千景の二大スタアが顔をあわせ、高校生二人には大船の青春スタア田浦正己と野添ひとみが初めてのコンビで活躍するほか、北龍二、吉川満子、沢村貞子、市川小太夫、須賀不二夫その他水上令子、永井達郎、諸角啓二郎のパイプレー陣が出演している（十一日から大天地）



「ホンドー」

「肉の蝋人形」「フエザー河の襲撃」に次ぐワーナー立体映画の第三陣である。この映画は百十度を下らないという酷暑の地、メキシコ、チフアフア州カマルゴ附近でロケーション撮影され、ロケ参加の最古参ですら舌を巻く[illegible]たる僻地で毒へびに悩まされて製作したワーナーの野心作で「私は告白する」のロバート・バークスと「静かなる男」でアカデミイ賞を得たアーチイ・スタウトが灼熱の大自然をバツクに素晴らしいカメラ・ワークを見せている。ジョン・ウエイン初の立体映画というほかにこの作品の一大収穫はブロードウエイの舞台からすい星の如く登場したジエラルデイン・ペーヂの出現である。猛烈な殴り合いや近距離での射ち合い、インデアンの襲撃等、西部劇の全要素をもつた立体映画である。（十八日からセントラル）

＝地＝

石炭の街

本所　**原田　波人**

—ある闘争を歌える—

かつてひとびとはねこのように
盲従のパンを握りしめ痛苦の味
を嚙みしめていた。
いまそれを捨てる。
[illegible]るのダン[illegible]コースに[illegible]
踏みにじまれへこんでしまつた
それは底深く根を張る重圧への
対決である。
それは冷い魚族の血をもつもの
に投げつけた階級の悲願である
ある日市役所の屋上にひるがえ
る旗の赤さが目に泌みた。
働くものの旗が大衆の頭上にひ
るがえつたのだ。
そして夜はデモのかがり火が赤
々と空に映えた。それは働くも
のにとつて街のネオンよりも切
ない夢を燃やしつづける。
みんな高らかに歌を唄つたがそ
の歌声にはこみあげる怒りがこ
もつていた。それは冷い夜霧を
つんざきこだまする。
あゝそれらもえあがり湧きあが
る火のような息吹きがその夜坑
内からあがつた者ものたちの頭
脳をえぐつた。
男の顔は勁眼をかつとみひらき
強烈な抵抗を刻んでいる。
あの男もこの男も赤ん坊を背負
つた女までが何疑わぬ顔でその
男につづきデモに加わつていつ
た。
あるいは歌つて駅前に座り込み
雨の雑沓に憤りの涙をかくした
男たちもいた。
[illegible]たちの[illegible]えていたことを[illegible]
分たちの手によつていき動き出
してくる—働くもののすべてが
そう信じたときこの街の明日が
あつた。

炭婦協の唄

（炭鉱節）

一、赤い焔が燃えている
鉱山の女の赤い血が
共にがつちり手を組みて
守る家庭の炭婦協
サノヨイヨイ

二、いとしき貴男を守る為
やさしき母となるために
女の意地の見せどころ
私は貫く炭婦協
サノヨイヨイ

三、見たか聞いたか団結の
輿の心の美しさ
俺も惚れたよ二度惚れた
皆で育てよ炭婦協
サノヨイヨイ

四、貴男とならばどこまでも
働く者の幸せを
笑顔で仰ぐその日まで
永久に貫く炭婦協
サノヨイヨイ

四山　福永　亘

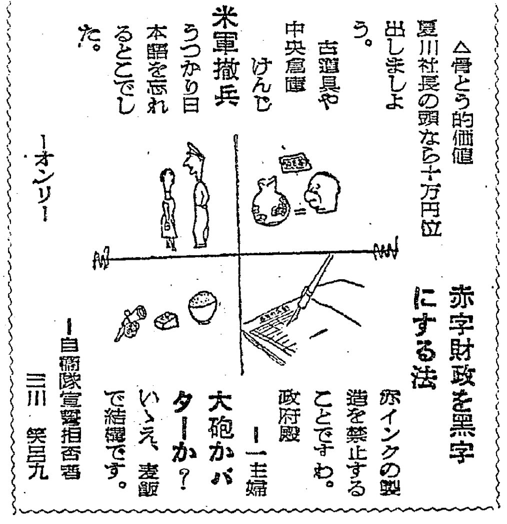
きしやの賛歌

一、いまや給料　つかい果て
いまは餓死線　わたるぞと
思うまもなく　どん底へ
落ちて怪我した　夢を見た

二、とおくに見える　給料日
ちかくにまねく　町の灯よ
むかしのくらしの　かすかすが
あとへあとへと　とんでいく

三、まわりどうろの絵のように
まわるくらしに　あこがれて
夢見ておりて　しらぬまに
はやくもすぎる　二十年

宮浦　高椋龍生



赤字財政を黒字にする法

政府殿

赤インクの製造を禁止することですわ。

—一主婦

大砲かバターか？

いゝえ、麦飯で結構です。

—自衛隊志望者　三川　笑呂九

△骨とう的価値

夏川社長の頭なら十万円位出しましよう。

古道具や　中央倉庫　けんじ

米軍撤兵

うつかり日本語を忘れるとこでした。

—オンリー—